

エリカ (M) 「これから始まるのは、生ボイスドラマコーナーです！」

エリカ (M) 「どこかにある『カルモア学園』にノール先輩とわたし、候補生エリカが学生として潜入して、学園にはびこる悪臭の元を消臭して、世界から悪臭をなくすために戦うと言うお話です」

エリカ (M) 「タイトルは——『デオフェアリーノールと秘密の部室』」

エリカ (M) 「これは、愛と勇気と真実と消臭の物語である」

エリカ (M) 「出演…デオフェアリー・ノール、秋山えりか、スタッフ先輩、たけちゃん」

エリカ (M) 「脚本、上城友幸」

エリカ (M) 「では、物語……スタート!!」

一拍の間

---

ノール（M） 「『デオフェアリー・ノールと秘密の部屋』

スマル10『スカトール』」

一拍の間

ノール（M） 「わたしの名前はノール。どこにでもいる、普通のデオフェアリーなの！この世界から悪いにおいをなくすため、カルモア学園の学生になって、人間の世界を見守っているんだ」

SE…ノックの音。

SE…ガチャ！とドアが開く音。

エリカ 「おはようございます、お姉様！」

---

ノール（M）「この、ノールのことを『お姉様』と呼ぶ騒がしい子は、後輩のエリカ。実はデオファエアリー候補生なんだけど、ノールと一緒にカルモア学園で消臭の任務についているんだよね」

えり「おはようございます」

ノール（M）「こっちの、あざといロリっ子は、後輩のえり。

新生で、消臭部に入部してきた変わった子。

どんな子なのか、まだ、よくわかんないんだよね」

ノール「どやあ！」

エリカ「今週はどんな格好でしょうか？」

ノール「今日は、駄目なひとには見えない制服！」

エリカ「あれ？ 前もありましたよね、制服？」

ノール「前の時はブラウス着てた。今日は体育用のTシャツを着てみた」

エリカ「ああ。なんかそういう、やる気無い女子いますよね」

えり「まだまだ暑いから、ブラウスよりも涼しそうです」

ノール「ホントは9月6日にちなんでもみようとおもって調べただけど……今日は『妹の日』なんだって」

エリカ「なんですか？」

ノール「妹の可憐さを象徴する乙女座の中間の日——の前の日だから」

エリカ「ずばり中間の日じゃダメなんですかね？」

ノール「えりは『妹』って感じだよ」

えり「あう、実はおねえちゃんなんですよう」

エリカ「そうなんだ、意外」

えり「妹がいるので……ご期待に添えず、スミマセン……」

エリカ「いや、そんな気にもならないでしょ」

ノール「妹じゃ、服装に結びつかないからなあ」

エリカ「そうですね……他はなんかなかったんですか？」

ノール「ちようどいいのがないんだよね。宇宙戦艦ヤマトが地球に戻った日とか」

エリカ「それは、使いどころのないトリビアですね」

ノール「9月6日が誕生日の人も、柔道の谷亮子選手やサッカーの澤穂希選手で競技バラバラだし」

えり「なるほどお」

ノール「漫画家の永井豪先生の誕生日だから、エリカはけっこう仮面のコスプレでも良かったよね」

エリカ「よくありません！間違はなく通報されます!!せめて

キューティーハニーにしてください!!」

ノール「広告設定はR18だから、大丈夫だよ」

エリカ「けっこう仮面は、忠実にコスプレしたら、R18の枠に収まりませんよね!？」

えり「ふわあ、わからないひとは画像検索してみてください」

エリカ「するときには背後に気をつけてくださいね!!」

ノール「ていうか、余計なことをすすめない!!」

えり「はわーっ!？」

---

一拍の間

エリカ 「今日はどこ行きますか？」

ノール 「暑いから、校舎の中」

エリカ 「ああ、いいですねえ」

ノール 「新校舎の方いってみよー」

えり 「なるほど、普段あんまり行かないですねえ」

ノール 「じゃあ、行くぞー！」

エリカ 「はい、行きましょう」

SE…ガチャ、とドアが開く&閉まる音。

一拍の間

えり 「新校舎ってどこのことなんですか？」

エリカ 「ああ、特に新しくもないもんね」

ノール「書道室とか理科の実験室とかある方。あと家庭科の調理室とか」

えり「あ、わかりましたあ」

ノール「だから、その角を曲がって……」

一拍の間

バスメル「やあ、ノールちゃん!!」

ノール「わひゃあっ!?!」

エリカ「曲がり角の向こうに王子がっ!!」

えり「はわー、出会い頭でしたー」

バスメル「これから部室の方に行こうと思ったのだけど……ここ

であえてうれしいよ、ノールちゃん」

ノール「うれしくないなあ、ノールは」

エリカ「でも、デオアリーナやクリアファイルのバスメル王子の

イラストをみて『なんで、こんなにいい男を嫌っている

んだろう』ってみなさん疑問らしいですよ?」

ノール「そーゆーひとは、試しにバスマル王子とサシで話してみればいいと思う。30分くらい」  
エリカ「ああ、うっとうしいですね、それは」

一拍の間

ノール(M)「そんなわけでえ……(やる気なさそうに)」

ノール(M)「この、いきなりうっとうしい、キラキラ二枚目のお兄ちゃんは『バスマル王子』」

ノール(M)「別にアラブかどこかの王子様ってワケじゃなくて、ニックネームってヤツ？」

ノール(M)「なんでか知らないけど、わたしのことを妙に慕っていて。何かというと、つきまとってクサイ台詞で口説こうしてるんだけど。ノール、クサイ台詞って大の苦手なんだよね」

一拍の間

バスメル「相変わらず美しい——もしかしたらボクは、キミを

見つめるために生まれてきた……そんな気がするよ」

ノール「気のせいだと思う」

エリカ「試しに、見つめられてみたらどうですか？」

ノール「人ごとだと思って、好き勝手だよねエリカ？」

#### 一拍の間

えり「ふわぁく……そんなロマンチックなことを言われたら、

その瞳に吸い込まれてしまいそうです（照れ）」

ノール・エリカ「「こら————っ!?!」」

ノール「だから、落ち着きなさい!!」

エリカ「今度はバスメル王子自ら掃除機ってことですか!?!」

えり「えうう、愛されているって素敵じゃないですか?」

ノール「なんで、ノールなのかな?」

エリカ「つるぺたるりって方が好きなんじゃないですか?」

ノール「エリカっ!!」

バスメル「キミを愛している自分の事を、ボクは誇りに思うよ」

ノール「ほら、えり！ 目がハート!!」

えり「ふわあ、だってロマンチックですからあゝ」

エリカ「ホント、なんでこんなに刺さるんでしょうね？」

SE・携帯の着ボイス音

バスメル「……ああ、ドワンゴ・ドット・JPでダウンロード

販売している、ノールちゃんの着ボイスが」

えり「かわいいですねえ。どこで手に入るんですかあ？」

ノール「はい、今週もこれからステマします！ ドワンゴ・ド

ット・JP取り放題の会員登録をすれば、いろいろな着

ボイスがゲットできるから、えりも会員登録した方がい

いよ」

えり「はい、ありがとうございますう！」

エリカ「コレをごらんの紳士・淑女の皆さんは登録していただい

てるんでしょうか？」

ノール「大丈夫、みんな登録しまくりだよ」

えり「ふぁー、ありがたいですねえ」

バスメル「すまない、行かなくてはいけなくなったよ」

ノール「はい、ごきげんよう（棒読み）」

バスメル「では、またあおう！ 恋のユア・アイズ・オンリー！！」

SE・歩く音（F・O・）

一拍の間

ノール「007の映画では『読後焼却すべし』って訳されて、

オシャレさがなかったよね」

エリカ「恋の読後焼却すべし——意味わかんないですね」

えり「はうー、原作小説が無粋な翻訳なのが元凶なんですよう」

エリカ「さて、行きますかお姉様？」

ノール「よし、行こうっ！」

エリカ「りょうかい」

えり「はーい！」

SE…歩く音(F・O・)

一拍の間

エリカ「放課後の新校舎は不気味ですねえ……」

えり「はわー、廊下の電気が消えてて暗いですよお」

ノール「うすぐらい廊下を歩いていると、とおくの方から演

劇部の発声練習とか聞こえてきて怖いよね」

エリカ「あくえーいーうーえーおーおー……(恨めしい感じ  
で)」

えり「はわー！ なぜかしみじみ不気味ですよ、先輩〜！」

エリカ「まさか、怖がられているとは思いませんでした」

ノール「『あめんぼあかいなあいうえお』なら、そんなに怖くな

いのにな」

えり「エリカ先輩、演劇やってるんですか？」

エリカ「まあね〜（どやっ）」

ノール「滑舌練習とか、得意だもんねエリカ」

エリカ「へ!?! も、もちろんですよ、それは」

ノール「『踊り踊るなら踊りの道理を習って踊りの道理通りに踊りを踊れ』——はい」

エリカ「『踊り踊るなら踊りの道理を習って踊りの道理通りに踊りを踊れ』——はい」

ノール「『旅客機100機・客各100人』——はい」

エリカ「『旅客機100機・客各100人』」

ノール「『この茶筒マサチューセッツ州製茶筒』——はい」

エリカ「『この茶筒マサチューセッツ州製茶筒』——って、もう

結構ですお姉様!!!」

ノール「結構言えたね〜／＼噛みすぎじゃない?（……などなど、

結果にあわせて、アドリブお願いします）」

えり「ふわぁ、女優魂ですねえ」

---

一拍の間

ノール「それはそうと……」

エリカ「なんか……臭いですね」

えり「おトイレのにおいです」

ノール「うんちくさいよね？」

エリカ「だから、発言するとき、少しはためらって下さい！

ヒロインなんですよ!?!」

ノール「だって、硫化水素のリユウの時に『糞便』って言い換え

たら、コメントで『ヒロインが糞便って言ってるぞ、

すごいな』って言われてて、意味なかったじゃん！」

エリカ「それでも、モロに言うよりはマシです！」

えり「ふあ、むずかしいですねえ」

一拍の間

ノール「いいこと考えたっ！」

エリカ「……やめてください（ため息）」

ノール「まあまあまあ、聞いて聞いて！」

エリカ「はい、なんででしょうか？」

ノール「お店で食事を『一番』とかトイレを『すけんや』とか暗号で言うことあるじゃない？ そう言う暗号を考えるのは、どう？」

エリカ「なるほど。トイレを『すけんや』は、かみじょーの元職場の暗号ですね」

ノール「仕事終わって飲みに行ったとき、居酒屋で『すけんや』行ってくる』って言ったら、全然知らないひとから『〇〇百貨店の方ですね！ いつもお世話になっております！』って挨拶されたっていった」

えり「はうー、バレバレなんですわねえ」

ノール「そんなわけで……ちっちゃい方！」

エリカ「はい」

ノール「『横浜』ってどうよ？」

えり「はい？」

エリカ「なんで横浜なんですか？」

ノール「それはあ……横浜の市外局番が——『045』だからっ

！ (トヤヤ)

エリカ「なんで045で、おし………もお、いいです(ため息)

」

ノール「これ、本当に使ってる所があるらしい」

えり「はう、洋服買ってたらカウンターの店員さんが『ちょ

っと横浜行つてきます』って、閉店30分前に言い出し

たつて、アレですね」

ノール「そして、おつきい方」

エリカ「はいはい」

ノール「『ビックベン』ってどう？」

エリカ「それ、半分英語にただけですよね！ ロンドンの人に

怒られますよっ！」

ノール「でも、カッコよくない？ 海外ドラマでこんなタイトル

のやつ、あるよね？」

えり「ふぁー、それじゃ『ビックベン・セオリー』になって  
しまいますよう」

エリカ「そのドラマ、スタッフ先輩が本気でお気に入りだから、  
やめてあげて！」

ノール「あと、どこかのアイドルグループの名前みたいで」

エリカ「それ、すぐくややこしくなりそうだから、やめましょう、  
お姉様!!!（上に思いつきかぶせる感じで）」

ノール「すごいね、エリカ。今日はCDドラマの彼みたいにな、ツ  
ツコミばかりだね」

エリカ「誰のせいですか、誰の!?!」

えり「はうー、ツツコミどころ満点ですねえ、先輩」

エリカ「そのセリフがツツコミどころ満点っ!!!」

えり「はわー!?!」

一拍の間

---

エリカ 「ソレはそうと……まだ臭いですね」

ノール 「うん。ビッグベン臭い」

エリカ 「そうですね……ビッグベンですね」

ノール 「同じビッグベンでもこの臭いは——どこかに、スカトールがあるはずだよっ！」

一拍の間

トオル 「今、俺の名前を呼んだのはアンタかい？」

SE…それっぽい登場SE

エリカ 「学ランと下駄で、ずいぶんバンカラですね」

えり 「ふあ、おとこっぽいですう」

ノール 「そういうアナタは誰？」

トオル 「俺は『スカトールのトオル』。よろしくな」

一拍の間

エリカ「スカトール!? デオアリーナで『スカトール兄貴、オツ  
スオツス!』と視聴者のみなさんに親しまれているとい  
う、あの!?!」

ノール「何の話?」

エリカ「かみじょーは、この話を書くために『檄!!極虎一家(げ  
げき! ごくとらいつか)』を読み直したららしいですよ」  
えり「はうう、ヒロインが枢斬暗屯子(すうざん あんとんこ)  
のアレですねえ」

ノール「質問に答えるっ! ていうか、普通は『魁!男塾』だよ  
ね!?!」

一拍の間

トオル「ふっ……騒がしいなア」

ノール「やっぱり、悪臭17人衆なワケ?」

エリカ「まさか、四天王では!？」

トオル「おいおい、よしてくれ」

ノール「え？」

トオル「確かに17人衆だが、四天王なんかじゃないぜ」

ノール「四天王——なんか、つてどういうこと？」

トオル「ふっ……それはな」

一拍の間

エリカ「はいはい！ 話が佳境に入る前に、イラスト募集コーナ

ー！ 今週のテーマは『だらしのない夏の制服姿のノール

お姉様』です！」

えり「採用された方には、『特製・だらしのない制服バージョン』

の デオフェアリー・ノールをプレゼントしちゃいます

ー」

トオル「ふっ、だらしねえな」

ノール「だからっ、特製品作らないからね!! ていうか、毎週このやりとりしてるけど、このコーナーは必要なの!？」

エリカ「そして、スケバン姿のノールお姉様も大歓迎!」

えり「枢斬暗屯子(すうざん あんとんこ) ファッションも新鮮でいいですねえ」

ノール「よくないっ! アレ、スカートの中、フレンドシじゃん!!」

#### 一拍の間

ノール「で—— どういうこと? 四天王と何かあったワケ?」

トオル「アイツら、最近出しゃばってやがるからな。悪臭なんて

のは、そんな立派なモンじゃねェよ」

エリカ「その通りなんですけど、悪臭本人に言われるとなんだか妙な気分ですね」

トオル「で、消臭部とか言ったな、おまえら」

ノール「そうだよ」

トオル「悪臭はみのがさねえ、ってことか?」

ノール「そうだね、悪臭は消すよ」

トオル「だったら——俺がもし、俺の悪臭でこの学校を満たしてやるって言ったら？」

ノール「もちろん許さない！——華麗に変身ッ！ でおどあーっ!!」

SE・変身SE&BGM

ノール「見た目はキュートに、中身は本気！デオフェアリー・

ノール！」

トオル「やっぱり、おまえがウワサのデオフェアリーか」

ノール「だとしたら!？」

トオル「そうイキるなよ。こっちはおまえらとやる気はねえぜ」

ノール「え？」

エリカ「どういうことですか？」

トオル「たとえば、俺が悪臭だと決め込んでやがるが……俺は低濃度では花のにおいなんだぜ」

えり「ふぁー、ほんとうなんですか？」

エリカ「……本当なんですか？」

ノール「なんで、エリカがわからないのかなあ」

一拍の間

ノール「確かに、スカトールは低濃度ではジャスミンやオレンジ

みたいなさわやかな香りだよ」

エリカ「そうなんですか？」

ノール「だから、香水なんかにも使われているし……タバコの香  
りにも使われていたりするんだよ」

えり「ふわぁ、そうなんですねえ」

トオル「悪臭17人衆なんて言ってるが、俺は別にそんな呼び名  
に未練はねえ」

エリカ「それは……」

トオル「俺は、いい香りでもいいんだ」

ノール「悪臭をやめるってこと？」

トオル「ああ、かまわねえぜ。良かったら仲間にでもいれてくれ  
や」

一拍の間

エリカ「ど……どうします、お姉様？」

ノール「どーしますって……どうしようか？」

えり「はうく……」

ノール「でも……悪臭じゃなきや、消す必要ないわけだよ。一

応、学園の生徒に化けているから、入部するには問題な

さそうだし」

エリカ「雰囲氣的に、応援団って感じですよね」

ノール「そーだね。ちよんわ、ちよんわって感じ？」

エリカ「古っ!!」

一拍の間

---

ノール「じゃあ、臭くないならいいよ。入部を許可する！」  
トオル「そうか！　じゃあ、よろしく頼むぜ！」

SE…臭塗っぽいSE

エリカ「あれ？　これは……」

えり「えっと……ビッグベンですねえ」

ノール「興奮して、濃度が高まったんだよ！」

エリカ「どういうことですか？」

ノール「スカトールはカフェインの二倍の興奮作用がある物質。

興奮して濃度が上がって——悪臭になったのかも！」

トオル「よっしゃあ！　やっつてやるぜ！」

エリカ「だから、興奮しちやダメですって！」

SE…臭塗っぽいSE

ノール「くさーい！　でodorあ、でodorあー！」

SE…デオ・デオドアーのSE

トオル「うわー、だめだー!!（棒読み）」

SE…悪臭退散のSE

ノール「あ……!!」

エリカ「なにやってるんですか!?　スカトール、消えちゃいましたよ  
たよ!?!」

ノール「だって臭かったんだもん！」

えり「はううう、いなくなっちゃいましたよう」

ノール「なに、ノールのせいっ!?!」

エリカ「なんで、逆ギレなんですか!?　明らかにお姉様のせいで  
すよね!?!」

ノール「うー……」

---

エリカ「そんな、恨めしそうな目で見てもダメです」

えり「えつとお……さっきの人、死んじゃったんですか？」

ノール「殺してないよ。消しただけ」

エリカ「一緒じゃないですか!？」

ノール「一緒じゃないよ！ この世界から消しただけで、どっかで生きてる。たぶん」

エリカ「それは……この世からいなくなって、あの世で生きてるってことですか？」

ノール「まあ、似たようなものかな」

エリカ「やっぱり、死んでるじゃないですかー！」

ノール「だから、殺してないって！ 消しただけっ!!」

一拍の間

アン「——うふふ、相変わらずねえ」

一拍の間

---

エリカ (N) 「こうして、スカトールは消臭された」

エリカ (N) 「しかし、これで終わりではない」

エリカ (N) 「今度の相手は17人衆か？ 四天王の残りがやってくるのか？」

エリカ (N) 「スカトール先輩は消されてしまったが、本当に死んでいないのか？」

エリカ (N) 「ノールのあの説明では、どう考えても極楽往生間違いなしだが、その辺は大丈夫なのだろうか？」

エリカ (N) 「デオフェアリー・ノールの、消臭は終わらない…」

一拍の間

エリカ (N) 「漂う悪臭を、なんとする」

エリカ (N) 「芳香剤では、ごまかしきれぬ」

---

エリカ (N) 「換気扇でも、どうにもならぬ」  
エリカ (N) 「マイクロゲルで、消臭する」  
エリカ (N) 「また、来週も……」  
ノール (N) 「『デオ・デオドアー!』」

おわり。